「学生王子」について

※原作とミュージカル

「学生王子」は「アルト・ハイデルベルク」として知られたウィルヘルム・マイヤー＝フェルスターの戯曲をもとにして、ドロシー・トネリーが台本・歌詞を、シグムンド・ロンバーグが曲をつけた全２幕５場のミュージカルである。1924 年 12 月にブロードウェイのジョルソン劇場で初演されて以来、608 回もロングランを続け、ロンバーグの作品でも最高のヒット作となった。ミュージカルの黄金時代といわれる 1920 年代において画期的な成功をおさめた作品である。

ロンバーグの音楽は、ウィーンのオペレッタの流れをひく格調高い伝統音楽に、新しいジャズのイディオムを組み合わせ、何よりも旋律の美しさとワルツやマーチを重視した構成に特徴をもっている。「学生王子」もその例外ではなく、至る所に珠玉のような美しい旋律がちりばめられていて、聴く人の心を魅了せずにはおかない。

なお「学生王子」は 1928 年にノーマ・シャーラーとラモンノヴァロの主演、1954 年にアン・ブライスとエドマンド・パードムの主演で二度の映画化が行われている。日本で公開された時はちょうど皇太子殿下ご成婚のニュースが世間を騒がせていたので、「皇太子の初恋」という邦題で上映された。この映画でパードムの歌のふきかえをマリオ・ランツァが受け持っていたことでも当時話題になった。

（以下映画とミュージカルの内容）

※おもな登場人物

◆ カール・フランツ 「カルスブルク王国」国王の甥で王位継承権を持つ王子。後に国王となる。

◆ ケティ　 王子が下宿することになった宿屋兼居酒屋の看板娘。宿屋の主人の姪。

◆ エンゲル博士　 王子の監視役兼家庭教師。王子の留学を計画し同行する。

◆ 宿屋の主人と女将　 王子が下宿することになった宿屋兼居酒屋を経営。

◆ ハイデルベルク大学の学生達 「学生隊」と呼ばれるグループを作っており、ケティを慕い居酒屋をたまり場としている。

＜あらすじ＞

中部ヨーロッパの小さな王国カールスブルクの若き子カールは厳格に育ちました。彼をとりまくカールスブルグ宮殿のすべての生活は、儀式一点張りの因襲と沈滞の牢獄でした。若き日の喜びを知らずして育ったカールが学校を修めるために教育掛りのエンゲル博士を伴ってハイデルベルグの大学へ来た時、彼は初めて溌剌たる人生を味わったのでした。（「輝かしき日々」）

賑やかな歌声と共にハイデルベルク大学の学生達が居酒屋へ、そしてビールを酌み交わし歌って賑やかに騒ぎ始めます。学生隊の一つ「ザクソン隊」の隊長が王子に近づき「是非、我が隊へ」と入隊を促します。王子はとまどいながらも入隊を決め、それを知った学生達はケティをも巻き込んでさらに盛り上がるのでした。

（「行進曲」「学生歌」「乾杯の歌～陽気な仲間」）

ハイデルベルグは学生の都、自由と歓喜と青春の輝く街でした。彼が下宿としてえらんだリューダー老人の家には美しい乙女ケティがいました。二人はたちまち初恋に結ばれていきます。そしてエンゲル博士は情味あふれる思いやりから彼らの恋に干渉しなかったのです。緑したたるネッカー河のほとりに、百花乱れる牧場の野に、楽しい囁きの幾月かが夢のようにすぎていきます。だがケティは若きカールと

到底結婚できる自分でないことを知っています。
その彼女が恐れていた日がやってきました。国王重病の知らせにカールが城へ帰ってみれば、国王はすでに彼の許嫁たるべき姫を取り決めていました。彼は再び昔の宮殿生活に戻らなければならなかったのです。せめて今一度、思い出の地に別れを告げるべくカール・フランツはついにハイデルベルクに戻ってきます。居酒屋には昔のような活気が蘇ります。約束通りケティとも再会を果たしたカール・フランツでしたが、会えるのはこれが最後だということを二人は知っているのでした。2 人の間には切ない別れの接吻が交わされました。

※代表的な歌と歌詞の大意

1. Golden Days

　ハイデルベルクに到着したカールスブルクの王子、カール・フランツの一行が下宿屋ルーダーの家に足を踏み入れると、酒場になっている裏庭から学生たちの歌声が聞こえてくる。「若いうちは大いに楽しもう」とラテン語で唄われる学生歌にしばし耳を傾けていたエンゲル博士（王子のお抱え教師）は、自分の学生時代を懐かしんで思わず歌い出す。

輝かしき日々よ
無邪気で誠実そのものだった若き日よ
馬鹿騒ぎをし　腹の底から笑えたあの頃
皆ふり返れば、気付くはず
青春時代こそが人生の華だったのだと

2. Drinking Song

　やがて王子は学生団のひとつ、ザクソン隊の隊長デトロフに誘われてその一員となり、宮廷から渡された規則書や日課表そっちのけで、かなりはめをはずした生活を送るようになる。ルーダーの酒場には毎晩のように、青春を謳歌する学生たちの陽気な歌声が溢れていた。

さあ飲もう、乾杯だ！
輝く星のような瞳に
熟れた果実のような唇に　ここにこそ希望がある
愛して信じて僕の胸に
さあ飲もう、乾杯だ！

3. Serenade

　さて、ハイデルベルグでの第一夜。寝つかれぬまま庭を散歩していた王子は、そこにケティーの姿を見つけ、自分の胸の内を歌に託すのだった。

頭上の月は枝に咲く花のように白く輝き
すべては夢心地に満たされて
聞こえるのはただ鳥の声だけ
どうしたら　この胸のときめきを抑えられようか、
それができるのは　　ただあなただけ
憧れの君、窓を開けて永遠の誓いを聞いてくれ！
木々に優しくこだまするわが想い、わが願い
ああ、この想いが届かぬなら、いっそ僕は死を選ぶ！
どうか、愛して･･･
いとしい人よ、ここに永遠の愛を誓おう！

4. Student March Song

ハイデルベルグの学生気質を讃えた終曲は学生隊の行進曲から始まる。現代の大学生気質にも一脈通ずるようなこの歌、人名を振った駄洒落もまじって威勢がいい。

行こうよ居酒屋へ、のどがかわいた
芳醇なビールをジョッキに満たし
楽しく歌声を張り上げよう！
カトー、プラトン、キケロ？
やつらと一緒じゃ気が滅入る
ホーマー、クセルクセス、クセノフォン？
へへん、なおさらやりきれない

優等生は女好き、
くたっぱっちまえ大先生
学問なんて遊びのひとつ
落第したって気にするな
何はともあれ飲むことだけは
みんな立派に卒業さ！

※映画版

1954 の映画では、カールの歌は「マリオ・ランツァ」によって吹き替えられている。
また、ロンバーグの作でない曲も３曲新曲として追加されている。

※ミュージカル版

原作の小説にも映画にも扱われていないが、ミュージカル版では王子の結婚相手の、マーガレット王女もまた、ターニッツという軍人との愛を諦めての結婚であり、そのウラ筋がミュージカルには存在する。

マリオ・ランツァ

1921 年生まれ。第二次世界大戦で軍の宣伝部員としてラジオ放送で様々の歌唱を聴かせ、戦後ラジオと契約音楽番組に出演、この縁で素材で歌を続けてきた彼は、素晴らしいテノーレ・リリコ・スピントに変身した。 映画業界もこの新進テノールを見逃さなかった。『真夜中のキス』(1949 年)『ニューオリンズの美女』は大ヒットし、名歌手カルーソーの伝記映画『歌劇王カルーソー』にも主演、多くのオペラ・アリアを歌い演じた。

こうして興行的には瞬く間に頂点を極めた感のあったランツァだったが、「シリアスな」音楽評論家たちは、「オペラ舞台に殆ど立っていない青二才俳優が、史上最高のテノール、カルーソーを演じるとは」といった論調が次第に支配的になっていった。

それでもランツァへの絶大な人気を当て込んでか、有名オペラ・ハウスからの出演の打診は少なくはなかった。しかしランツァはそれらオファーの全てを断り続ける。その真意は不明である。スターとしての成功に傷が付くかも知れないリスクを冒したくなかったのかも知れないし、準備不足のままデビューし失敗すれば、夢は永遠に絶たれるだろうと知っての賢明な選択だったかもしれない。賢明ではなかったのは、この頃から彼がアルコールに逃避の途を求めるようになったことである。

1957 年 5 月、マリオ・ランツァのヨーロッパ大陸ツアーはすべて興行的にはかなりの成功であったが、一方でランツァの健康上の懸念も明らかになってきた。しかし、彼は本格的なオペラの勉強をすすめ、ローマ歌劇場 1960 年-61 年シーズンにレオンカヴァッロ『道化師』カニオ役でデビューするスケジュールも公式に発表された。1959 年年 10 月 7 日肺塞栓症のためローマの病院で亡くなったが、アルコールと薬物への過度な依存と当時流行していたダイエットを強行していたこと等が影響していたと思われる。38 歳であった。

※原作の小説

原作の小説　「アルト・ハイデルベルク」　　マイヤーフェルスター作

東ドイツ、ザクセン地方のカールスブルグ公国の王子、カール・ハインリッヒは、早くから両親を亡くし、伯父、大公の手で世継ぎとして育てられた。王子の生活は哲学博士を家庭教師とした、規則に縛られた厳格な毎日だった。王子は学齢に達すると、当時の習わしに従って、他の貴族の息子達と同様に、大学へ行くことになった。入学試験を受け、めでたくハイデルベルク大学に入学が決まる。

いよいよハイデルベルク行きの列車に乗り込んだ王子は、まだ見ぬ学生の町、古城の町に胸を踊らせている。王子にしてみれば初めての城外生活である。王子の下宿はネッカー川の畔にある、リューダー夫妻の経営する宿で、いつも若い学生達で賑わっていた。この宿にケティと言うウィーン生まれの娘が働いていた。ケティは宿屋の主人の親戚筋にあたり、故郷には小さい時からのいいなづけが、牛飼いをしながら待っていたが、ケティはどうもこの男との結婚に気が進まなかった。

いよいよ王子の乗った列車が到着する。王子を歓迎するため、ケティは花束を用意し、詩を暗唱した。「遠き国よりはるばると、ネッカー川のなつかしき、岸に来ませる我が君に、いまぞ捧げんこの春の、いと麗しき装飾、いざや入りませ我が家に、いずれ去ります日もあらば、しのび賜れ若き日の、ハイデルベルクの学びやの、幸多き日の思い出を」王子の前でこのような詩を暗唱したケティは、美しい王子を目の前にして夢中だった。そしてどちらも親を早く亡くしているという境遇から、共通の寂しさも手伝って、二人は身分の違いを越え、急速に親しくなっていった。学生達も日夜おきなく、王子の宿を訪れ、王子は歌とワインと歓声に包まれて、幸せな学生時代を過ごしていた。学生達ばかりでなく宿に出入りする使用人達とも仲良くなった。61 歳の洗濯男、ケラーマンには、自分が大公になったら給仕長にしてやるなどと気さくに話をするのだった。

４カ月ほど過ぎたある日のこと、カールスブルグ公国より使いの者がやってくる。大公が病気にかかり治りそうもないので、すぐに帰国するようにと伝える。一年間の大学生活をわずか４カ月で終えなければならない苦しさに、王子は悩むが、国政の重要性を考えると、帰国を決意しないわけにはいかなかった。王子はケティとも悲しい別れを交わし、ハイデルベルクの町を後にする。

２年が経ち、カール・ハインリッヒはカールスブルグ大公となった。カール・ハインリッヒは、気の進まぬ政略結婚をあと２週間後に控えて、ますます深い悲しみに沈んでいた。そんな時、ハイデルベルクから一人の老人が訪れてきた。洗濯男のケラーマンだった。久々に懐かしい顔を見て、カール・ハインリッヒは胸が一杯になる。ケラーマンに温かい飲み物を勧めながら、彼は次々と昔の友人の消息を尋ねていく。懐かしいケティはまだ宿にいて、王子が去ったあとよく泣いていた事などを聞くと、大公はいてもたってもいられなくなり、その夜すぐにハイデルベルクを訪れることにする。青春のわずかな時を過ごした、懐かしい町ハイデルベルクへ。

しかし、時は移り、世の中は変わっていた。大公を再び迎えたハイデルベルクは、昔の学生王子を迎えた町とは違っていた。大公が泊まっていた宿も、昔ほど学生が寄りつかなくなっていた。学生達も、打ち解けた昔の姿を失い、大公に会見するというので皆緊張し、おどおどしている。大公のために歌った懐かしい学生歌も、精彩がなく、彼はわざわざハイデルベルクにやってきたことを後悔しそうになっていた。

「青春の時とはなんと、うつろいやすいものであろうか」そんな中で変わらぬものがあった。それはケティの愛だった。「みんな昔のままだったよ、ケティ。マイン川も、ネッカー川もそれからハイデルベルクも。ただ人間だけが変わってしまった。昔のままの人は一人も見つからなかった。」大公はケティを抱き寄せ「変わらないのは君だけだ。ケティ君一人だ」そのケティもウィーンに帰り、結婚することが決まっていた。そして大公自身も、２週間後には結婚式を控えているのだった。「私たち二人は、どうしようもなかったのよ。そうでしょう。私たちはいつもそのことを知っていたわね」

ハイデルベルクを去ってゆく大公の脳裏に、過ぎ去った短い美しい青春の思い出が浮かんでは、消えてゆく。

「ぼくのハイデルベルクへの憧れは、君への憧れだった」ケティにそう言って、別れを告げた大公は、新しい人生に向かって歩いていくのであった。